

『懷風藻』 吉野詩に見える神仙思想について

—— 吉田宜80番詩に於ける受容態度の考察 ——

善養寺 淳 一

一、はじめに

『懷風藻』に収録された詩は近江朝から奈良朝末期に及ぶが、本稿で考察対象とする時期は、これを四期に分けた場合の第三期（奈良遷都から天平九年、七一〇～七三七年）にあたる。^①この時期の詩の傾向は、従駕・侍宴・遊覧が中心とされ、集団的な文学の時代であった。^②この傾向をふまえると、詩が詠まれた「場」の理解は作品読解の基本となる。筆者が注目する古来仙境と意識される吉野地域、特に吉野離宮はその「場」のひとつの中心として、所謂吉野詩の舞台となっている。この詩が詠まれた「場」を考察することで、より深い作品理解がはかれるものと考えている。具体的には詩創作の「場」としての吉野という空間に加え、従駕・侍宴・遊覧の時期という時間軸を特定し、改めて吉野詩を照射し直してみることで、漢詩総集という全体的視点とは別の角度から、その詩の創作された「場」を考察していきたい。本稿では特に詩に現れた創作態度や情景、思想的傾向や社会的背景を追究することにより、そこに現れた吉野

詩に於ける神仙思想の受容態度を探っていきたい。本考察では、第三期の吉田宜80番詩に焦点を当てて私見の一端を述べてみたい。

二、吉田宜の生没年・履歴について

まず、吉田宜の生没年・官位等の履歴を次に掲げておきたい。
（日本古典文学大系69小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』、新日本古典文学大系12・13青木和夫他校注『続日本紀』一・二、竹内理三他編『日本古代人名辞典』第三卷、辰巳正明『懷風藻全注釈』に拠る。）

生没年未詳。渡来系人。『懷風藻』目録に「正五位下内藥正吉田連宜。二首。」とあり、本文に「正五位下圖書頭吉田連宜。二首。年七十。」とある。

○文武四年（七〇〇） 八月僧より還俗、吉の姓と宜という名を賜り務広肆を授けられた。

○和銅七年（七一四） 正月正六位下より従五位下に叙せられる。

○養老五年（七二二） 正月医術に優れ師範たるに堪えるを以て褒賞

を受ける。(従五位上)

○神亀元年(七二四) 五月吉田連の姓を賜る。

○天平二年(七三〇) 三月太政官上奏年齒老衰により弟子を取り業を伝習せしめられた。

○天平五年(七三三) 十二月図書頭に任ぜられた。

○天平九年(七三七) 九月正五位下に叙せられる。

○天平十年(七三八) 閏七月典薬頭に任ぜられた。

右の記録を見ると、生没年は未詳であるが、およそ文武朝から聖武朝にかけて活躍した渡来系の人であり、その官位の履歴から医学・薬学の専門家であることが判る。詩文の才も豊かで、『懷風藻』の二首(79・80番詩)の他『万葉集』巻五に短歌四首を詠んでいる。

次に本稿で考察対象とする吉田宜の80番詩「五言。駕に吉野宮に従ふ。一首。」について、扈從した行幸の時期は何時なのかという時間軸の特定について考察を進めていきたい。

三、吉野行幸と吉田宜80番詩

80五言。従駕吉野宮。一首。

吉田 宜

神居深亦静。

神居しんきよ深くして亦また静しずけく、

勝地寂復幽。

勝地しょうち寂しづけくして復また幽かそけし。

雲卷三舟谷。

雲は卷く三舟みふねの谷、

霞開八石洲。

霞は開く八石はちいしの洲。

葉黃初送夏。

葉このは黄たひて初はじめて夏を送り、

桂白早迎秋。

桂はぎ白はぎけて早も秋を迎ふ。

今日夢淵上。

今日夢けふのゆめの淵ふちの上に、

遺響千年流。

遺響ゆきやう千年に流らふ。

「五言。駕に吉野宮に従ふ。一首。」(本文・訓読とも日本古典文学大系69『懷風藻』に拠る)と題する吉田宜の詩である。(平声、尤韻、韻は幽・洲・秋・流。)詩の内容は、「神居」(吉野離宮)の静寂と勝景を謳うものである。頸聯(傍線部)に注目すると、この離宮付近の景色を、第五句の「葉黃初送夏」(黄葉たひて初めて夏を送り)で、夏を見送った葉は黄色に変じと謳い、第六句は、「桂白早迎秋」(桂白けて早も秋を迎ふ)と、桂の花の白色を対置して色づいた秋景を叙している。この夏から秋への季節の移ろいは、離宮に於ける作者の実体験に基づく表現と思われる。この二句の表現を念頭に吉田宜が従駕した行幸時期を推定してみたい。

ここで前項二、に示した吉田宜の履歴(生存期間)と重なる行幸記録は次のとおりである。

I 大宝元年(七〇二) 文武天皇の行幸は、二月二十日から二十七日。

『続日本紀』巻第二大宝元年「二月〇癸亥、吉野離宮に行幸したまふ。〇庚午、車駕、吉野宮より至りたまふ。」(3)

II 大宝元年(七〇二) 持統太上天皇の行幸は、六月二十九日から七月十日。

『続日本紀』巻第二大宝元年「六月〇庚午、太上天皇、吉野離宮より還幸す。」

宮に幸^{みや}したまふ。秋七月辛巳、車駕^{きやが}、吉野離宮より至^{いた}りたまふ。⁽⁴⁾

Ⅲ大宝二年（七〇二）文武天皇の行幸は、七月十一日から。（還幸の記事はみえない。）

『続日本紀』巻第二大宝二年「秋七月〇丙午、天^{すめらみこと}皇、吉野離宮^{よしののとう}に幸^{みや}したまふ。⁽⁵⁾」

Ⅳ養老七年（七二三）元正天皇の行幸は、五月九日から十三日。

『続日本紀』巻第九養老七年「五月癸酉、芳野宮^{よしののみや}に行幸^{みゆき}したまふ。〇丁丑、車駕^{きやが}、宮に還^{かへ}りたまふ。⁽⁶⁾」

Ⅴ神龜元年（七二四）聖武天皇の行幸は、三月一日から五日。

『続日本紀』巻第九神龜元年「三月庚申の朔、天^{すめらみこと}皇、芳野宮^{よしののみや}に幸^{みゆき}したまふ。〇甲子、車駕^{きやが}、宮に還^{かへ}りたまふ。⁽⁷⁾」

Ⅵ天平八年（七三六）聖武天皇の行幸は、六月二十七日から七月十三日。

『続日本紀』巻第十二天平八年「六月乙亥、芳野離宮^{よしののらみや}に行幸^{みゆき}したまふ。秋七月〇庚寅、車駕^{きやが}、宮に還^{かへ}りたまふ。⁽⁸⁾」

右の六回の行幸のうち、80番詩の情景をふまえて、時節がこの詩に合致する行幸となると、「夏の終わりから秋の初めへの季節の推移」という情景から、Ⅱの持統太上天皇行幸、Ⅲの文武天皇行幸、更に、Ⅵの聖武帝行幸が可能性の高いものであるといえる。ではどの行幸の可能性が一番高いのかという点であるが、私は次の二点からⅥの行幸時と考えたい。

1 80番詩に詠まれた晩夏から初秋の情景描写の点から、Ⅲの行幸時

ははずれるということ。

2 次項に述べる「八石」の意味が、当時流行していた天然痘に関係する点から、Ⅵの聖武帝の吉野行幸に、吉田宜が従駕したものと推定してみたい。『続日本紀』の記録からは、疫病の全国的流行は、ⅠからⅤの行幸前後（前年・翌年）には見られないということ。

よって80番詩がこの行幸時に作られたものと仮定して、詩が創作された「場」というものをふまえた上で、そこに現れた吉野詩の神仙思想の受容態度を探っていきたいと思う。

四、80番詩に見える神仙思想の受容態度

次に、吉田宜が属従した当時の社会状況と80番詩に用いられた詩句の分析により、そこに現れた神仙思想の内容や享受の傾向というものを検討してみたい。

この天平八年の聖武帝の吉野行幸は、次の二点において特記すべきものであった。

①吉野離宮の変遷の歴史という面から、最初に行幸された応神天皇から約四百五十年の行幸の長い歴史のうえで、この行幸は最後の行幸であった⁽⁹⁾ということ。

②他の吉野行幸に比べて、その滞在期間が十六日間と異例の長さであった⁽¹⁰⁾ということ。

②の長期行幸の理由については、渡部晃宏氏が二条大路より出土の木簡⁽¹¹⁾の解説により、天平七年に流行した天然痘との結びつきを指

摘している¹²。それは木簡（「南山之下」呪符木簡）の表面の文言が、この疫病を芳野山の大蛇に平らげてもらおうという内容であり、裏面には、「急々如律令」（法令用語から転じて、災厄退散せよ、という呪句の意。）とあることから、長期間の行幸が必要であつたとするものである¹³。

この行幸の目的に関係があるのではないかと考えられるのが頷聯の部分である。考察の順序は前後したが、この二句を検討してみた。第三句の「雲卷三舟谷」（雲は卷く三舟の谷^{みふね}）は、雲は三舟（吉野の三船山）の溪谷に湧き上がる情景であり、第四句「霞開八石洲」（霞は開く八石の洲^{はちせきしよ}）は、霞がしだいに消えていく八石の州という意味とされている。

問題となるのは「八石」である。小島憲之氏は「八石は未詳、かりにハチセキとよむ¹⁴。」とし、更に一案を示すとして『抱朴子』論仙篇の八石を連想して用いたかも知れないと述べている¹⁵。また、辰巳正明氏は「吉野川の地。八石は八石薬の取れる地か。抱朴子内篇明本に「鍊八石之飛精者」、郭璞「馮夷」に「稟華之精。食惟八石。乗龍隱淪」とあり、飛翔することの可能な薬物と思われ、その取れる地が吉野なのであろう¹⁶。」と述べている。

私は、小島・辰巳両氏を支持し、一歩進めて、「八石」の80番詩での意味を推測してみたいと思う。まず、『抱朴子』（石島快隆訳注、岩波文庫、昭和十七年）に於ける「八石」の語六例（①卷二論仙・②卷四金丹・③卷五至理・④卷十明本・⑤卷十四勤求・⑥卷十八地眞）のうち、③・⑥はその薬効を説いている。それは具体的には、③では八石は「ありふれた薬¹⁷」に属し、その効験は鬼神を祓い除け、

虎豹を退け、内臓の塊を破壊し、鍼灸の届かぬ病根を除去し、死後すぐの人間をよみがえらせ、死者の靈魂を呼び戻すのだと言う。また、⑥では草根木皮の薬と少量の八石の服用でも病気を治し、寿命を延ばすのだと抱朴子が師匠の説を力説している¹⁸のである。

では「八石」と呼ばれるものはどのようなものなのか。本田濟氏の『抱朴子』の語釈によれば、それは「丹薬の原料になる八種の鉱物。朱砂・雄黄・空青・硫黄・雲母・戎塩・硝石・雌黄」であるという。つまり道士が練って精製する仙薬の材料ということになる。この八種の鉱石について、どのような病気の症状に効能があるのか、ということを『意訳神農本草経』（以下『本草経』と省略する。）から要約して列挙すると次のとおりである。

①朱砂 Ⅱ『本草経』では「丹砂」（たんしゃ）。朱砂、辰砂ともいう。天然に産する硫化第二水銀。主として身体中の病、特に肝・心・脾・肺・腎の五臓の病気や、その他もろもろの百病をも治すことができる。

②雄黄 Ⅱ『本草経』でも「雄黄」（うおう・ゆうおう）。鶏冠石のことで天然に産する砒素の硫化鉱物である。主として、悪寒と発熱をともなう寒熱病やリンパ腺腫^{そろう}のような鼠瘻^{そろう}の病や、たちの悪い吹出物の悪瘡や疽^そとよばれる熱気^{そろう}がはなはだしくて根が深い悪性のはれものや、痔疾や死肌すなわち肉が消滅してくる病を治すことができる。

③空青 Ⅱ『本草経』でも「空青」（くうせい）。中空球状の孔雀石である。主として青盲とよばれて外見上はなんともないの

に物が見えない病や耳が聞こえなくなった耳聾の病を治すことができる。

④硫黄Ⅱ『本草経』では「石硫黄（せきいおう）。硫黄のこと。主として婦人に多い病や特に生殖器がただれる陰蝕の病や、疽とよばれる熱気がはなはだしくて根が深い悪性のはれものや、痔疾や血の流れの滞りによって生じた悪血による病を治すことができる。

⑤雲母Ⅱ『本草経』でも「雲母（うんも）。多く花崗岩中にあるて、アルミニウム、カリウム、ナトリウムなどを含む珪酸塩の鉱物で、白雲母を用いる。主として身皮の病すなわち体中の皮膚の病や、死肌とよばれる肉が消滅してくる病や、風の邪気にあてられて半身不随をおこした中風の病や、悪寒と発熱をとまなう寒熱病や、車や船の上にいる時のようにふらふらむかむかする病を治すことができる。

⑥戎塩Ⅱ『本草経』でも「戎塩（じゅうえん）。大青塩といい、石塩、つまり塩湖や塩地や土壌からとれる食塩である。主として目が明らかに見えるようにする作用がある。また目痛の病を治すことができる。さらに元気を益し肌の肉や骨を堅くし、いろいろな毒気や虫を用いたまじないの蠱毒の毒気を取り去る働きがある。

⑦硝石Ⅱ『本草経』では「消石（しょうせき）。朴消の比較的純なものと考えられる。主として肝・心・脾・肺・腎の五臓の病や、熱気が体内に積み重なった積熱の病や、胃脹と

よばれる胃腸が張る病や、胃閉とよばれる胃腸がつまりて大便もガスも出なくなった病を治すことができる。

⑧雌黄Ⅱ『本草経』でも「雌黄（しおう）。三硫化砒素のかたまりである。主として、たちの悪い皮膚病の悪瘡の病や、頭禿すなわち頭の毛が抜けてはげがある病や、乾いたかさぶたができて痒い皮膚病の癩とか疥の病を治すことができる。

右の記述からは、これらの鉱物が、仙薬の材料である以前に通常の薬として十分に一般の病を治す効能があるということが理解できる。

ここで前述二、の吉田宜の履歴を参照していただきたい。吉田宜は渡来系の人でその履歴を見て明らかなのは、医術に優れた技量の持ち主であるということである。その医術は、「養老五年・正月（七二二）医術に優れ師範たるに堪えるを以て褒賞を受ける。」という『続日本紀』の記述からも窺えるものであり、「天平十年・閏七月（七三八）典薬頭に任ぜられた。」（同）という記録を見ても當時に於いて一流の腕であったことを証明している。諸芸に秀でていた吉田宜が還俗させられた理由は、方（道教の方術）・医の二芸活用のためであったと推測されている²¹。後に典薬頭に任ぜられたということは、律令官制下の典薬寮の長官として、官人の医療や医学生の養成、医薬品の管理を職掌とする機関の最高責任者であったわけである。この履歴から改めて吉田宜の80番詩の「八石」を読み直すなら、この語は前述の仙薬の材料の鉱石の総称という解釈が妥当ではないだろうか。吉田宜は、この「八石」の効能を十分理解の上で、

詩句としていることは言うまでもないだろう。

「八石」の鉱物八種は、『抱朴子』の語る仙薬の材料であるが、これらの鉱物個々の薬効に注意してみるなら、天然痘の治療に効果がありそうな効能を拾うことができる。そもそも天然痘とはどのような病気なのか。現在は地球上から姿を消した感染症であるがその一般的経過は、潜伏期のあとに高熱と前駆疹があり、解熱後に本格的な発疹があり、癬痕を残して治癒するもので、接触感染する恐ろしい病気である。この八種の鉱物の薬効には、悪寒と発熱を抑える解熱作用や、体中の皮膚の病を治す効果が含まれている。吉田宜は、「八石」が仙薬を調合する材料であると同時に、その材料の鉱石個々の薬効も十分に知っていたということが窺われる。それは当時大きく社会問題化しつつあった天然痘対策にも有効に使えるものであったことを、知識として知っていたことを意味していると思われる。

次に、この80番詩が詠まれた「場」として吉野離宮を考えるわけであるが、詠まれた時期を、天平八年（七三六）の聖武帝の吉野行幸と考えた場合、この「八石」はどのような意味で詠まれたのかという点である。天平八年の吉野行幸の主たる目的が、前年から流行していた天然痘という疫病の調伏にあったのであれば、この行幸に従駕した臣下として、現下の大問題は悪疫の退散に絞られてくる。眼前の秋景を詠むと同時に「その川原の石は「八石」にも通ずる薬効を持った鉱石である、此処は仙境吉野であるから」という詠み方こそ、この行幸に扈從した医術・薬学専門家として相応しい詠み方ではなかったろうか。

五、まとめ

ここで本稿の結びとして、以上の考察結果をまとめておきたい。

一、吉田宜の80番詩の「場」の理解には、その従駕の時期の特定が問題となる。私は、この詩の詩句の分析と当時の社会背景から80番詩が詠まれた時期を、天平八年（七三六）の夏の終わりに秋の初めの聖武帝の吉野離宮行幸時と推定して考察を加えた。

二、80番詩の「八石」の詩句は諸説あるが、私は小島・辰巳両氏の説を更に進め、『抱朴子』にいう仙薬の材料の鉱石の総称とし、吉田宜がこれを当時の社会問題であった天然痘治療の薬効を含む鉱石であることを把握した上で、詩に詠み込んだものであると解釈した。80番詩は当時の社会問題である天然痘退散を意識した詩であるといえる。

三、80番詩の検討をふまえて、神仙思想の受容について考察を加えた結果、『抱朴子』内篇記載の薬効に注目しているという傾向が看取できるのである。つまり、渡来系人吉田宜の受容態度は、日本人作者の受容傾向とはやや異なるものであるといえる。日本人であれば、海や山河の果てに神仙境を想い、仙人仙女との邂逅を夢見るといった趣向であるが、吉田宜の場合は、中国の仙道のように仙薬を詠み込んだ、より具体的、本格的、中国的な神仙世界を創作するような受容態度であったといえよう。この受容傾向は、吉田宜が渡来系の医術・薬学の専門家であった

ことから当然ではあるが、『懷風藻』吉野詩の作者の中にあつては、特異な傾向であるといえるのではないだろうか。

【注】

- (1) 辰巳正明「懷風藻」(小野寛・櫻井満編『上代文学研究事典』おうふう、平成八年、所収) 一五三―一五六頁。
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 青木和夫他校注『続日本紀一』(岩波書店、平成元年) 三五頁。
- (4) 注(3) 四一頁。
- (5) 注(3) 五九頁。
- (6) 青木和夫他校注『続日本紀二』(岩波書店、平成二年) 一三三頁。
- (7) 注(6) 一四七頁。
- (8) 注(6) 三〇三頁。
- (9) 中川登史宏『京都御所・離宮の流れ——転変のものがたり——』(京都書院、平成九年) 七七―七八頁。
- (10) 渡部晃宏『平城京と木簡の世紀』(講談社、平成二十一年) 一九一頁。
- (11) 注(10) 一六〇頁。
- (12) 注(10) 一九一頁。
- (13) 注(10) 一九二―一九三頁。
- (14) 小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(岩波書店、昭和三十九年) 一四二頁。
- (15) 注(14) 四六四頁。
- (16) 辰巳正明『懷風藻全注釈』(笠間書院、平成二十四年) 三二二頁。

頁。

- (17) 本田 濟『抱朴子内篇』(東洋文庫512、平成二年) 一〇六頁。
- (18) 注(17) 三八八頁。
- (19) 注(17) 三二頁。
- (20) 浜田善利・小曾戸丈夫『意釈神農本草経』増補第三版(築地書館、平成五年)
- (21) 高島正人『藤原不比等』(日本歴史学会編、吉川弘文館、平成九年) 一三〇頁。